

Title	従機能の概念 : R.Mertonのdysfunction概念の再検討
Sub Title	Some problems on Merton's functional theory
Author	横山, 寧夫(Yokoyama, Yasuo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1965
Jtitle	哲學 No.46 (1965. 2) ,p.415- 424
JaLC DOI	
Abstract	The functional theory has recently taken a new turn by Merton's contribution. But I cannot help having some questions about the treatment of his concept of "dysfunction ". The functional relation in humanistic coefficient is laid upon the subjective, dynamic equilibrium, which cannot be explained simply by saying that social function may be functional for some groups and dysfunctional for other groups. The problem is how some institution is supported by the members of a society. Merton says that social function refers to observable objective consequences, and not to subjective dispositions, and the failure to distinguish between the sociological consequences and the psychological dispositions leads to confusion of functional analysis. I think it is Lure. But he does not directly present " negative function ", but the concept of dysfunction, as a co-ordinate concept of positive function. We must admit, however, that there is strength in the degree of subjective intention, accordingly, in the degree of function. Owing to the very existence of a group of large member which affirms negatively the institutions, they presently continue to exist without being erased, however anti-social they may be. This group of negative function constitutes an unstable class of constant changes between functional and dysfunctional groups ; it has, however, an important roll to mediate the equilibrium of the above-mentioned antipodal groups.
Notes	橋本孝先生古希記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000046-0423">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000046-0423</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 従 機 能 の 概 念

—— R. Merton の dysfunction 概念の再検討 ——

横 山 寧 夫

古典的な社会有機体説以来、個人あるいは特殊な文化を、個を含む全体との関連において把えようとする観方は、形式社会学派のような社会の実体観を排斥する諸派を除けば、社会学の基本方針の一つであつたといえよう。とくに、米国文化社会学の成立に重要な役割を占めた米国文化人類学の一派は、個人と社会との機能関係を社会的にも心理学的にも深化したが、現在の立場からみれば、この機能そのものの概念の使用が未だ曖昧のままに放置され、而も機能は一方的に積極的機能のみが重視されていた傾向があつた。これに対して機能の主観的動機と客観的結果との混同を避けるために、顕在的機能と潜在的機能との区別が既に C. Kluckhorn によつて提唱されたが、これらの概念をうけつぎ、この機能理論を従来の唯物史観や存在拘束性理論に対決せしめ、非発生論的な知識社会学の方法論にも適用した Robert Merton は、多種の機能概念を整理すると共に、従来の機能概念による限界維持的な社会の静態的概念に対して逆機能 (dysfunction) の概念を提唱し、機能主義の展開に一生面を拓いたといわれている。この機能概念についてはその系譜を辿り、これを根底的に検討することが望ましいが、この小論において私は Merton における逆機能の概念だけを取りあげて、その再検討を当面の課題としたいと思う。

先づ Merton は、彼の「社会構造と社会理論」(1949)において機能及び逆機能の概念を次の如く定義する。「機能とは、一定の体系の適応 (adaptation) ないし調整 (adjustment) を促す観察結果であり、逆機能とは、

この体系の適応ないし調整を減ずる観察結果である」(邦訳46頁)。即ち逆機能は一定の事物の機能が他の事物の統合的全体 (integral whole) と機能的関連が減ぜられる状態を指すのであつて、社会の一定の事物 (制度) が全体 (共同体) に対して目的論的前提を固執する立場はここでは一見清算されているように思われる。機能という生物学的研究の方法論的枠組は有機体論の実質的概念に還ることなく、ただ方法論的に積極的な価値を見出す限りにおいて有効性をもつが、併し Merton において生物学的世界の類比が全く払拭されているであろうか。例えば害虫は人間の身体や農作物に対して明らかに害を加えるが、一方人間の感情に喜びを与えたり、土壌を豊饒にする他の虫や動物の餌ともなることによつて間接には人間に対し利益ともなることができる。これは害虫が人間に対して或る側面では適応せず、或る側面では貢献を果しているとも考えられる。併しこのような事情を直ちに人間的事象の機能関係に類比し、あてはめることはできないであろう。何故ならば人間的事象における機能関係はこのような表面的現象では測ることのできない主体的な均衡関係におかれているからである。即ちその相互依存関係は決して一様ではなく、また人間が自発性という一側面をもつことによつて個人と共同体における機能関係は上述の生物界における例とは異つた複雑な関係におかれているのである。これは単に外面的な役割とその効果のみで理解されるものではない。例えば一定の集団のリーダーは、その指導者としての職務を以て共同体に貢献しているのであるが、そのためには共同体が彼をリーダーとして受入れる素地が作られていることが前提とされている。そこには先づ、彼がリーダーであることを自ら希望するか、個人的意志に反しても「共同体のために」自発的にリーダーたることを承認するか、他人の推挙により止むをえず就任するかと云つた事情があり、また共同体の側からいえば、彼をリーダーとすることに反対する一部の者も自ら進んで多数の意志を尊重するとか、その他の目的から彼の就任を容認するという事情が考えられるから、單純に彼の就任が一

部の者にとって逆機能であり、他のものにとっては正機能であると云いきれないのである。これは何よりも人間の事象における相互関係が主体的な均衡関係であることを示している。従つて共同体と個人との間の適応ないし調整という概念は、共同体の要求と個人の要求との同時的な充足が、何等かの動的均衡において成立していることを意味するのである。そこには何れかの要求が優位に立つことはあつても、個人の側からはこの不均衡を調和しようとする自発性が働らくか、共同体の要求を制度的に受入れるかしてこの均衡が可能となるのである。即ち個人（或いは個人を基体として成立する特殊な社会制度）が共同体に対して一定の役割をもつにしても、その役割が如何なる仕方において遂行されているかということが問題なのである。また共同体の側からいえば、共同体自体の構造が多岐に分裂して統一を欠き、その要求の内容が種々の異質的な要素を含んでいるとか広い解釈の枠をもつことによつて個人の要求を迎えることのできる状況におかれているか、或いは共同体の極めて強い要求の中に個人の要求を呑みこむかして、この動的な均衡が保たれているのである。

併し Merton のように機能あるいは逆機能の概念を、一定の体系の適応ないし調整を促がし、または減ずる客観的な観察結果においてみようとするときには、必然的に機能の内的支持の仕方は問題外におかれるであろう。すなわちここでは機能か逆機能かがその観察結果によつて機械的に判定されるのであつて、その質の側面は見すごされることになる。この場合、私のいう内的支持の仕方というのは正機能の強度の幅を拡張しようとする意図によるものなのであつて、主観的意向の種類を意味するのではない。Merton は明らかに、「機能の概念は観察者の見地を含み、必ずしも当事者の見地を含まない。社会的機能とは、観察しうる客観的諸結果を指すものであつて、主観的意向（ねらい、動機、目的）を指すものではない」（前掲書20頁）と述べ、客観的な社会学的結果と主観的意向とを区別しなければ機能分析は混乱に陥るであろうと云つているが、これは確かに正当な

提言であり、ここに顕在的機能と潜在的機能の区別がなされるのである。併し Merton が行為者の目的や動機ではなくて客観的結果を強調したことは、欲求が満たされているか否かということであつて、如何なる仕方で欲求が満たされているという自覚は薄いのではないかと思われる。云う迄もなく機能分析は、一定の特殊な機能目的に限定した限りにおいてのみ認められるのであつて、多数の結果の中から最初に想定されている機能目的に関して、その欲求が充足されていれば、他の点で如何に異つた結果が出ようとも等価関係が成り立つのである。従つて最初に想定すべき機能目的の、観察者における観点の相異によつて種々の異つた立場から機能の客観的結果を測定することができるわけである。この場合、客観的結果として認定する基準をどの辺におくか、換言すれば、極めて幅の広い欲求充足という結果を何処で切つたらよいかという問題が考えられねばならない。それは当然或程度、行為者の動機や志向性に関係してくることである。これは同一の動機や目的においてもその志向性に強弱のあること、従つて機能そのものの強さの程度に幅ないし段階の存在することを意味するものであつて、而もこれは社会の動的な理解のために重要な意義をもつものといわねばならない。Merton はまた機能の諸概念をめぐる一般的混乱として、従来、「社会学的項目が、それを含めた社会体系または文化体系に対して果す積極的貢献に社会学的観察を限定する傾向」(前掲書45-46頁)を挙げた。これも正しい提言であると思うのであるが、彼は「積極的」貢献という言葉を用いながら、これに「消極的」貢献という概念を対比させることなく、いきなり積極的機能に対して逆機能の概念を提出するのである。即ち Merton ちにおいて「積極的」機能という言葉は個人的志向の強度を示すものではなく、客観的整合性の度合いを指標としたものであつて、これは正機能と同義に用いられていると思われる。私はむしろ積極的機能に対する消極的機能を重視するものであり、これを「従機能」と名づける。この概念は機能概念を動的均衡の立場から解する場合に必然的に要請される概

念であり、これは外面的には正機能を果していながら、個人の内的自発性を失った制度的な支持の仕方による機能の形式であつて、特に私の用語で追従性の支配する社会体制に多く見出しうる形式である。

この従機能の概念を説明する前に、逆機能に関する Merton の引用する例を検討してみよう。これについて Merton が指摘している唯一の例は政治的ボス組織である。ボス組織は民主主義的な社会体系に対しては明らかに積極的な貢献をするものではないから逆機能的であるが、一方現実的には或る特定の集団に対してはむしろ積極的な機能を果している。この事実を理解するためには、(1) 道徳的に是認された仕方ではこのような機能を果すことが困難であるために、ボス組織が何時でもこの機能を代つて果す構造的脈絡のあること、(2) ボス組織がなければ充足することができないような欲求をもっている下位集団のあること、が前提されている。下位集団の困窮者に援助の手を差伸べることは法定の福祉機関でも出来ることであるが、官僚的な援助は個人的事情を詮索することによつて多くの人々の自尊心を傷つけるのに対して、ボス組織は物分りよく特権を奪われた人々を擁護し、個人的出世街道から締め出された人々に対しこれに代る社会的移動の通路を与えてやることのできる。結局あらゆる成員に対して経済的繁栄や社会的出世を約束し乍ら、実際に或る集団にはその通路が閉ざされていたり狭められている場合には、反つて没道徳的な物分りの良さの方が通用して居り、ボス集団はこのような意味で機能的役割を演じているのである、と Merton は説く。併し勿論これは政治的ボス組織を支持するということを意味するのではない。

上述の例はかなりの説得力をもつ意見であるが、併しこれを詳細に検討してみると若干の疑問がないでもない。即ち上述のボス組織は、社会の一部の集団（即ち困窮している集団）に対しては機能するが、他の集団、即ち全体からこの下位集団を除いた集団に対しては逆機能的に作用する、と言い換えることができる。この場合、逆機能は下位集団を除いた他の集

団の凡べてに作用しているのか、その中の特定集団であるのか、或いは民主主義という集団目標そのものに対して行われているか、が明瞭でない。更に、若しこのように集団体系を全く別個に二分してしまうと、両者の内面的構造関連ないし人間のもつ内面的な両面性が把えにくくなるのではないか、と思われる。即ち下位集団でない人々の中には暗黙裡にボス組織の存在を認めることによつて（「その存在は当然だ」「仕方がない」「必要悪だ」など）、また下位集団に属する人々もボス組織の恩恵をうけることに対して自己の行為の反社会的な抵抗感を排除することができないということによつて、そこに区分された集団的結合の紐帯が見出されるのである。このことは Merton のいう「構造的脈絡」にも暗示されてはいるが、ここではボス組織がいきなり代換的選択構造ないし解毒剤としてのみ説明されている。併し若し下位集団以外の人々に対してボス組織が全く逆機能的であるとするならば、その組織は数の力や法の権力によつて早晚除かれてしまふであらう。当事者以外には全く同情者をもたないギャング組織などが直ちに圧殺されるのもこの故である。

人間は常に両面的性格をもっている。それは一定の制度に対して正機能的にも逆機能的にも適合しうるという可能性であり、これは特に過渡期的体制において著しく現われるようなパーソナリティの分裂として示される。例へば現在のわれわれに体験される性格、即ち理論的建前としての近代性と、実践的生活態度としての伝統主義的性格の混淆などにあらわされる矛盾などがこれである。これは多かれ少かれ現実的人間には普遍的な事実であつて、これを一定の集団としての単位に高めた社会的性格としてみた場合にも、やはり必然的に社会的性格の両面性として表現される。併しこれは Merton の例で示されるように或る制度が一部の集団に機能し、その他の集団には逆機能するといふのではなく、この二つの事実は全体的社会的性格に関連的に含まれており乍ら、尚その他の部分において、この何れにも属さない不安定な部分のあること、換言すればその何れにも容易に

変ることのできるような部分のあることを認めねばならない。さもなければ社会はこの二つの集団に対立的に分裂するのみであつて均衡を失い、何れの存在も危胎に瀕することになるであろう。社会的分裂の危機は上述のような機能的および逆機能的集団の存在そのものによるのではなく、両者間の内面的支持の均衡が破られた処に生ずるのである。いまこの社会的性格の二面性を reference group に還元してみれば、この二面を積極的に支持する集団を両極として、その両者の交叉する次元に、その何れも含み、その何れにも消極的な支持を与える媒介的集団が介在する。それは消極的にせよ、支持を与える限りにおいて正機能の範疇に属するものであるが、この集団の存在によつて両者の内的関連が可能となり、而も現実的にはこの集団が無視できない大多数を構成する場合が多いのである。この場合、或る集団に対し正機能、他の集団に対して逆機能を果す一定の制度は、上述のような集団に対しては「従機能」を果すのである。

従機能は結果的には一定の体系への適応ないし調整を促がしはするが、同時にこれを減ずる方向にも容易に転化する。それは前述のように積極的な支持を失つた消極的な構造維持の仕方を示し、一定の制度を「止むを得ない」「必要悪だ」という形で形式的妥協的に支持するのであるから、社会的価値に対するその態度は正機能の場合とはかなり異つており、内面的な強い力をもたない。それにも拘らず、従機能を果す集団は、正機能及び逆機能を果す集団、例へば社会的理想を追う集団と反社会的集団との間にあつて両者を繋ぐ役割を果しており、従つてこの集団の存在は一定の制度の存続の可否に重要な役割を占めているのである。即ち、このような集団の存在が大多数を占める程、社会的対立は緩和されはするが社会は現状維持的ないし保守的傾向となり、逆にその存在が小さくなる程、社会的対立は激化して妥協を許さない二者択一的行動ないし急進的傾向が強くなるであろう。この両者を再び個人的心理に則して考えるならば、個人的パーソナリティにおける断層が比較的緩やかで、自己の欲しない異種の考え方を



広く押付けられている状況か、この断層が極度に尖鋭化して、その内的矛盾に結着をつけざるをえない状況を表現する。而してこの体制的基礎としては、前者に対して強制的な思想的統制の行われる専制社会が、後者に対しては自発的な思想的寛容の行われる個人本位の社会が考えられる。但し思想的無政府状態としての「悪しきデモクラシィ」の場合は前者に属することになる。

この従機能（あるいは消極的機能）の概念に対して、正機能を積極的機能と消極的機能に区別するならば、形式的には逆機能もまた積極的逆機能と消極的逆機能に区別すべきだという批判もあるが、これは明らかに個人と共同体との間を動的均衡として把えない処に生ずる意見である。私は従機能を正機能と逆機能の媒介概念として把えているのである。およそ個人と共同体との間の動的均衡は必ずしも全き充足された均衡であるとは限らない。その理由は、個人の側に過度の要求があるか、共同体の側に過度の要求があるからである。過度の要求とは、その要求の求め方が強すぎるか、要求の内容が分裂して種々の異質な意味を含んでいることを示す。この何れの場合にも個人と共同体との間の適応ないし調整は減ぜられる。たしかに「減ぜられる」のであつて「無くなる」のではない。ただ均衡の分裂が極大となれば、弱者は抹殺されるであろうが、一般にこの均衡を支えているのが従機能の作用なのである。

しかし Merton は政治的ボス組織の例証にこだわりすぎているために、この内面性の理解よりも階級的（或いは階層的）区別を重視しているように思われる。いま試みに日本の天皇制を例にとつてみよう。天皇制は（その緩和された形態においても）原則的には民主主義の原理には逆機能的である。従つて表見的には民主主義を是認する大多数の民衆には逆機能的であり、僅かに古い価値体系を固執する団体に対してのみ機能的であるようにみえる。併し現実的なデータはこのような団体の存在を拒否する多くの人々によつても天皇制が支持されていることを証明している。この場合、

天皇制そのものの解釈の仕方に相違のあることを一応おくとしても、そこには独自の歴史的伝統的感情が近代化の感情と融合しているのであつて、天皇制は一般民衆の中に生活感情としては機能的に、政治理念としては逆機能的に作用しているといえるであろう。彼等は夫々の特殊な目標に対して、ある時は機能的に、ある時は逆機能的に作用する不安定な層を形成し、両極端の中間にあつて何れにも加担し、また離反する可能性をもっているのである。これは従来 of 調査技術でDK集団とも政治的無関心とも解されているところのものと無関係ではないが、一般に肯定或いは否定の集団にまで深く入り込んでいること、而もそれが両極端の均衡の媒介的役割をもっていることに注意しなければならない。何れにせよ Merton の集団的二分法は三分法にするのが好ましいと思われる。

Merton は逆機能の概念を、その強弱の差はあれ、凡ゆる社会に有効な概念として考えているようである。事実、矛盾のない現実社会はありえず、積極的機能のみが作用する社会はむしろ抽象的な極限概念にすぎないから、その主張に咎める処はないのだが、この場合、何故逆機能が起るのか、すくなくとも、如何なる状況において逆機能が強く作用するのかという問題については必ずしも詳細に論及されていない。上述のボスの例についてみるならば、一応は自分に都合のよいボスの援助を、官僚的援助を排してまで選択した下位集団が存在するからだ、と答えられるであろう。併しこの場合、すでに選択の自由が前提されており、また自己の欲求不満をボス以外の代替物に求めなくてもよい或る状況を前提としている。即ちこの例は比較的自由な社会という特殊な社会類型の特殊なケースなのであつて、もし逆機能の概念を一般化しようとするならば社会体制の基本的性格の中に、その種々の成立の仕方を確定しなければならない。即ち如何なる社会においてもある程度の機能と逆機能が同時に存在するのだが、如何なる体制の中で逆機能が一般に現われ、而も強く、また弱く現われるかという概念図式を、一定の論理的手続きの形式の中で合理的に構成しておくこ

とは、実証的研究に先行して確定すべき必須の要件であると思われるが、この点について Merton は論及していないのである。また正機能にせよ逆機能にせよ、その支持の強度が問題とされる場合、その積極性や消極性を判定する極め手は何かという、それは制度を内面的に成立せしめているエトスへの人間の在り方であるということができる。このエトスへの同調は積極性を示し、たとえ形式的客観的には適合的であつても、この内面性を欠くときには消極性に転化する。機能の問題を論ずる場合にはこのような点を先づ明確にしておくべきであると思う。

個と全体との機能のあり方は社会体制の相異によつて或程度基本的な変化を示す。正機能、従機能、逆機能が如何なる社会体制において優位に現われ、且後退するかについて私は他の論文で述べたことがあるので繰返さず、此処では Merton の dysfunction 概念の検討だけに止めたいと思う。最後に一言述べるならば、Merton のこの理論は勿論、周知の「中範囲の理論」に基づくものであると思われる。中範囲の理論であるからには、逆機能の概念が社会変動の与件にのみ関するものであつて、変動そのものの発生起源を説明するものではないという彼の機能分析の限界や、機能や逆機能の客観的結果を測定すべき観察主体の観点の浮動性或いは機能とシステムとの関連の無視などは最初から当然予知すべき事柄であり、その理論に対して不当に高い次元を要求することはむしろ見当外れでさえあると思われるであろう。それにも拘らず、戦線の整備は常に普遍的理論との結び付きを見失つてはならない。中範囲の理論は特殊理論と一般理論の両属性をもつものとして提唱されているのであるが、その実質はどちらかといえばむしろ特殊理論に近いものなのである。現在、中範囲の理論の追従者は極めて多く、また特殊理論の意図する処は充分理解しうるにしても、私は Merton が連続的に将来に期待した大概念図式の構成を、もつと積極的に（必然的に演进的ではあるが）基礎付けるべきであると考えている。